

「代官山蔦屋書店で脳科学∞つながる」参加レポート

2017年に理研は創立百周年、脳科学総合研究センター（BSI）は20周年を迎えます。このBSI創立20周年を記念して、「代官山蔦屋書店で脳科学∞つながる」[※]というトークイベントをシリーズ化して開催しています。作家やビジネスパーソンなど、異なる分野のプロフェッショナルとBSIの研究者による対談を通じて、普段は聞くことのできない研究者の声をお届けとともに、対話から生まれる新しい発見を体感していただき、脳科学をもっと身近に感じていただこうというイベントです。

第1回目の登壇者は、芥川賞受賞作家の絲山秋子さんとBSI精神疾患動態研究チームの加藤忠史チームリーダー（TL）。加藤TLは、双極性障害（いわゆる躁うつ病）の研究を28年間続けながら、土曜日は診療の現場に出ている現役の精神科医でもあります。一方、絲山さんは作品の中で何回か双極性障害を患った登場人物を描かれていますが、ご自身も双極性障害を患った

ご経験をお持ちです。

双極性障害とは「躁状態」と「うつ状態」を繰り返す原因未明の脳の病気で、うつ病とは異なる病気です。しかしながら、「うつ状態」から発症することが多く、「躁状態」が現れない段階ではうつ病と診断するしかないのが実情です。また、抗うつ薬は、患者さんとの相性の見極めが難しいといわれています。絲山さんも合う薬を見つけるために5ヶ月間入院されました。絲山さんは効いているのかいないのか実感がないというその薬を「ホウレンソウ系」と名付けました。コンニャクは食べると胃腸の調子が改善されるのを実感できるけれど、ホウレンソウは体に良いといわれてもその効果を実感することは難しいからだそうです。なるほど（笑）。

これまで双極性障害に特化した創薬は行われてきませんでした。なぜなら、薬の効き目を試すために欠かせないモデル動物がいなかったからです。加藤TLは、自発的にうつ状態を繰り返すモデルマウスをつくり出すことに成功し、マウスで原因部位を特定しました。これで薬の試験ができるはずです。

この20年で脳科学は非常に進歩しました。しかし、MRIで見えるのは主として大脳皮質です。疾患の原因の本質的な部分はMRIでは写らない小さな部位にあるかもしれません。「さまざまな分野の研究を行っている総合研究所という理研の強みを生かし、物理学・化学・計算工学などの力を借りて脳の研究を進めていきたい。“脳を見る技術”が進歩すれば、脳研究は急速に進むはず」と加藤TL。

定員70名の会場は満席。場所柄もあってか、若い年齢層の参加者も多く、“街中で脳科学を語る”、そんなひとときでした。

BSI創立20周年記念トークイベント 「代官山蔦屋書店で脳科学∞つながる」

第1回 作家 絲山秋子×理研BSI 加藤忠史
“晴れ時々くもり ～気分障害と脳科学～”

2016年8月23日19:00～21:00
代官山蔦屋書店1号館2階 イベントスペースにて開催



※代官山蔦屋書店とのコラボレーションで2017年10月までに全6回の開催を予定。第2回は9月6日にすでに終了していますが、第3回以降の詳細は随時ウェブサイトに掲載致します。ぜひご参加ください。